

令和 2 年 6 月 28 日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02252

研究課題名(和文) 剽窃と自己の言葉 八文字屋本浮世草子における重複表現の研究

研究課題名(英文) Plagiarism and Words by myself ; Appropriation of words in Hachimonjiya-bon Ukiyozoshi

研究代表者

高橋 明彦 (TAKAHASHI, Akihiko)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：00264573

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、八文字屋本浮世草子の用例語句索引を増補する作業を周到に行い、これを踏まえて、浮世草子における言語の問題、たとえば江島其磧による剽窃について、彼の重複表現に注目することによって、これまでとは異なる新たな文学的視点を構築することを目標としている。

その結果、次の3本の単著論文を執筆した。1「《理を責める》考 八文字屋本浮世草子の人物と作劇」、2「浮世草子における《やつし》の変奏 古典世界の拡充と世界交差同定」、3「浮世草子における視点の問題 江島其磧『けいせい伝受紙子』、演劇的・俳諧的・説話的」

研究成果の学術的意義や社会的意義

2000年に『八文字屋本全集』(全23巻)が完結し、八文字屋本がすべて活字で読めるようになり、これまでは素材論・典拠論が中心であった浮世草子八文字屋本の研究にも、新たな飛躍進展が期待されている。

本研究は、作者江島其磧による西鶴作品からの文言丸取り(剽窃)の意味を、自他の言葉の問題として、素材論から一歩踏み出して、文学的な問題として考察することを目指すものであった。また、人物造形における道徳的行為の意味、古典素材の扱い、語り手の視点の問題、この3点に関する論文を執筆した。近世前期小説の研究の新たな端緒として、今後さらなる進展のためには十分な成果であると評価できる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we carefully work on augmenting the example phrase index of Hachimonjiya (八文字屋) Ukiyozoshi (浮世草子), and based on this, we pay attention to his duplicated expressions about language problems in Ukiyozoshi, such as plagiarism or appropriation by Ejima Kiseki (江島其磧). By doing so, the goal is to build a new literary perspective that is different from the past.

As a result, I wrote the following three papers. "Thinking about "Ri wo Semeru(To appeal rationally) with a Focus on Charactors and Dramaturgy in Hachimonjiya-Ukiyozoshi", "A Variation of "Yatsushi(trans-falling)" in Ukiyozoshi of Expantion of Clasical World and Trans World Identification", "Problems of Viewpoint in Ukiyozoshi: "KEISEI DENJU GAMIKO (けいせい伝受紙子)", as Stage-Dramatic, Haikai-Descriptive, Tell-Narative".

研究分野：日本文学

キーワード：八文字屋本 浮世草子 江島其磧 多田南嶺 井原西鶴 重複表現 やつし 叙述

1. 研究開始当初の背景

浮世草子は、井原西鶴『好色一代男』（天和2年刊）に始まり、以降一〇〇年間に涉って近世小説の典型的ジャンルであった。なかでも京都の書肆・八文字屋八左衛門が出版したいわゆる八文字屋本は、浮世草子の代表といえ、作品数はおよそ一六〇を数える。その作者には江島其磧、多田南嶺、八文字其笑・瑞笑がいる。

2000年に『八文字屋本全集』（全23巻・汲古書院）が完結し、八文字屋本がすべて活字で容易に読めるようになった。それ以前、浮世草子の研究は、長谷川強『浮世草子の研究』（1969年刊）における総合的な研究を導きとして典拠論・素材論を中心に展開してきたが、現在こうして八文字屋本の語彙全体を見通す環境が整い、新たな飛躍進展が期待されている。たとえば、作者江島其磧は、自らの作品に井原西鶴の浮世草子の文言を丸取りすることがあり、研究史はこれを剽窃と見なしてきたが、はたしてその理解で十分か。浮世草子研究は、こうした問題を、典拠論・素材論から一步踏み出して、文学的な問題として考察していくべき段階にあると私は考えていた。

2. 研究の目的

浮世草子研究のあらたな段階に入るべく、段階的に三つの目的を設定した。

- I. 八文字屋本浮世草子の語句（一般語彙と故事成語・諺、人名、地名）を悉皆的に採取し、用例索引を作成する。具体的には、私が参加した『八文字屋本全集語句索引』（汲古書院・2013年刊）の増補・修正を行う
- II. 用例索引をもとに、《重複表現》を拾い出し、その実態を明らかにし、意義を考察する。
作者江島其磧は、自らの作品に井原西鶴の浮世草子の文言を丸取りすることがあり、研究史はこれを剽窃と見なしてきた。其磧は創意に欠けた凡庸な作家にすぎないのか？これを、典拠論としてでも、テキスト理論的に《引用》などに解消するのでもなく、文学における言葉あるいは記述・叙述の獲得、ひいては世界（当世と古典と）の認識・交渉、といった問題として考察したい。
- III. このほか、用例索引をもとに、語彙の注釈をふまえて次の論文を執筆する。
ア)《理を責める》登場人物たちとその人物造形について
イ)『契情太平記』と多田南嶺の《やつし》について
ウ) 南嶺没後作品における、南嶺的手法 俳号の利用について

3. 研究の方法

- I. 語句索引の増補・充実につとめる。研究期間を通してこれを充実させ、次の論文執筆に資するものとする。
- II. 重複表現の拾い出しを行う。最終年度をめどに、論文化する。
- III. その他の論文を執筆する。研究期間の途中で執筆する。

4. 研究成果

- I. 用例索引の作成について

研究期間において、基本的な作業として、用例索引の増補・充実につとめてきた。この作業をもとに、次の論文等を研究成果として得た。なお、用例索引の公開予定は無い。

II. 重複表現の拾い出しとその意義の考察

研究史はこれまで、江島其磧による西鶴作品からの語彙、文章の丸取りを剽窃と見なしてきた。ただし、其磧は自分の文章を（長いもの、短いものどちらも）別の作品に使っていたりしている。本研究ではこうした例を《重複表現》と呼ぶが、この存在は何を意味するのか。私は次のような仮説を立て、それを本研究のメインテーマとした。

仮説を、順を追って説明しよう。まず、自身の文章を再利用するのは剽窃とは言わない。《自己の言葉》だからである。他人の言葉を利用することが《剽窃》である。しかし、この基準を以て剽窃か否かを区別するのは実は不可能である。なぜなら、言葉は本来的に他者のものだからである。人はそれを使うことで自己の言葉にしていく。自他の境界はきわめて曖昧なのだ。

さて、研究史がこれまで其磧を剽窃と批判する際、あたかも出来の悪い学生がレポートを書くとき意味も分らず専門書を丸写ししている（いわゆるコピペ）、そんな情景を思い描いていただろう。が実際、其磧が西鶴の文章を丸取りする際、其磧は西鶴の文章を吟味熟読できていたのではないか。これは今まであまり考えて来られなかった視点である。私の仮説は次の通りである。

其磧は西鶴の言葉を借りて浮世草子を書いてきたと述懐している（野傾旅葛籠・自序）。言葉は学ぶものである。学ぶなかで、他者の言葉を自己の言葉にしていく。そして、気に入った言いまわしなどは、自己の言葉であろうと、本来は他人の言葉であろうと、必要に応じて何度も使うのである。ある時点において、其磧にとっては西鶴の言葉も其磧のものとなるのではないか。篠原進が仮定したような《西鶴引用ノート》を脇に置いて見ながら書いているのではなく、其磧はあくまで記憶ですらすら書いているのではないか。

言葉はだれのものか。これは法律や権利の問題ではなく、《文学の問題》である。ただし以上の仮説は、それが妥当であるかどうかを、具体的な語彙調査によって数量的に検討しなければならない。作者の創意の無さを強調し、浮世草子総体の価値を貶めてきただけの典拠研究とは根本的にちがひ、この仮説は、新たな浮世草子像を模索するものである。

さて、本研究期間を通じてこのことを論証すべく、重複表現を拾い出し、研究を積み重ねたが、本研究期間においては、期待するほどの明快な論拠を示すことはできず、論文完成には至らなかった。ただし、上述の仮説を放棄する必要は無いと考えている。

III. その他の論文執筆

(ア) 単著論文「〈理を責める〉考 八文字屋本浮世草子の人物と作劇」

所収『金沢美術工芸大学紀要』60号、2016年3月刊（p.155～180）

一般に八文字屋本は、それ以前の西鶴浮世草子と比べて人間がいきいきと描けていないと評価されてきた。なぜ、人間が描けていない（ように見える）のか、そのシステムを考えた。浮世草子には、登場人物たちの言動を評してよく使われる「理を責める」という表現がある。登場人物は、儒教的倫理に立ってその体現者として行動し、発言するのである。この実態を、まず具体的な用例の拾出しから始め、次に儒教道徳的な善悪正邪に収まりきらない人情の発露を取出す理論的視点を試行的に設置し、最後にこれを西鶴「忍び扇の長哥」および江島其磧『善悪両面常盤染』に適応させて論じた。

(イ) 単著論文「浮世草子における《やつし》の変奏 古典世界の拡充と世界交差同定」

所収『金沢美術工芸大学紀要』62、2018年3月刊(p.165~178)

古典的題材を遊郭の色恋を舞台に当世化することを《やつし》と呼び、これは江戸時代を通して一つのパロディの方法として認識されてきた。浮世草子の《やつし》については長谷川強が、古典世界を使って現代をえくり出した西鶴と異なり、西沢一風および江島其磧のやつしは古典世界を使う技巧に走り不自然に陥り現代性を描き出す力を失ったと評した。長谷川の研究は、やつしの題材を詳しく解明した優れた研究であるが、私は改めて、浮世草子における《やつし》を、定まった方法としてでなく、作家・作品ごとに変容しつつあった方法であり、現代を描くこととは意図を異にする古典世界との連続の意識を持ったものであることを指摘し、具体的に江島其磧『通俗諸分床軍談』および、多田南嶺『契情太平記』を例に、登場人物達が古典世界を生きようとした様として論じた。

(ウ) 南嶺没後作品における、南嶺的手法 俳号の利用について

本件に関しては、論文を執筆しなかった。

(エ) 単著論文「浮世草子における視点の問題 江島其磧『けいせい伝受紙子』、演劇的・俳諧的・説話的」

所収『金沢美術工芸大学紀要』64、2020年3月刊(p.121~140)

浮世草子は小説であるが、同時代的には、俳諧(とくに井原西鶴において)、演劇(とくに西沢一風、江島其磧において)と主題・素材・語彙的に交渉(剽窃を含む)を持つ。このことを、赤穂事件を題材とした江島其磧『けいせい伝受紙子』の文体的(とくに登場人物や語り手の視点の移動)という点から論じた。特に、視点が固定的な演劇、視点が浮動的な俳諧、そして視点を観念化する説話という三つの類型を『伝受紙子』の文体の中で具体的に指摘した。さらに、同作は、其磧が好色物から武家物へ方向転換を図る先蹤となった作品であるが、この先に方法化され類型化されたやつし・かたぎなどの文体が完成していったと推測した。

以上、当初の計画の4本の論文のうち、論文化できたものは2本であったが、計画外の発展的論文(エ)という成果1本を見た。合計3本の論文を執筆した。決して十分な成果ではないが、そもそも本研究は、典拠論・素材論から果敢に踏み出して浮世草子研究に文学的な問題を見出す極めて挑戦的な試みであり、成果が確実に期待できるとは限らないものであった。その点で、更に進展させていくためには十分な成果であると評価している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高橋明彦	4. 巻 33
2. 論文標題 木越治の浮世草子研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北陸古典研究	6. 最初と最後の頁 55,60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 明彦 / タカハシ アキヒコ	4. 巻 62
2. 論文標題 浮世草子における《やつし》の変奏：古典世界の拡充と世界交差同定	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 金沢美術工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 178 - 165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.15103/00000574	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋明彦	4. 巻 60
2. 論文標題 《理を責める》考 八文字屋本浮世草子の人物と作劇	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 金沢美術工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 155-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.15103/00000018	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋明彦	4. 巻 64
2. 論文標題 浮世草子における視点の問題：江島其蹟『けいせい伝受紙子』、演劇的・俳諧的・説話的	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金沢美術工芸大学紀要	6. 最初と最後の頁 121-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----